

江南和幸教授・退職記念最終講義 「里山が育てた植物文化」について

丸山 徳次

2008年3月8日（土）、里山ORC主催により、江南和幸・龍谷大学理工学部教授の退職記念最終講義「里山が育てた植物文化」が行われました。龍谷大学深草学舎3号館101号教室で、午後1時30分に開始された本講義には、約110名の聴講者が集まり、終了後の午後4時から3号館地下食堂で催された茶話会にも、60名を超す方々が集まりました。

里山ORC研究スタッフの一人でもある江南先生は、1990年4月、大阪大学から開設一年後の龍谷大学理工学部に着任され、2008年3月、定年退職を迎えられました。江南先生の専門は材料工学・金属学ですが、近年は、そうした専門の分析技術を龍谷大学所蔵の歴史的資料や顔料の調査研究に応用され、科学考古学の分野にも研究を進めてられました。また、植物についての該博な知識を駆使して里山学にも貢献されていることは、よく知られているところです。龍谷大学瀬田学舎隣接地（「龍谷の森」）の保全に努力され、2003年7月の「龍谷の森」里山保全の会の設立にあたっては、世話人代表となられ、2004年5月の里山ORCの開設にも力を振るってられました。本最終講義の参加者全員に10枚ずつ配布された植物画は、江南先生の画集『里山百花－滋賀の里山歳時記』（サンライズ社、2003年）の額装版でした。

江南先生は、すでに『里山学のすすめ』（丸山徳次・宮浦富保編、昭和堂、2007年）の中で「里山が生んだ日本の植物文化－江戸の人びとの暮らしのなかに生きた自然」を論じておられますが、本最終講義ではさらにその論考を深められ、特に、宮崎安貞の『農業全書』と貝原益軒の『菜譜』との比較を加えて論じられました。講義は次のような諸章によって組み立てられていました。

（1）宮崎安貞『農業全書』と貝原益軒『菜譜』に載る里山由来の食用植物

(2) 江戸に始まる世界に誇る園芸

(3) ヨーロッパの公園・町を飾る日本の植物

(1) では、『農業全書』と『菜譜』に記載されている食べられる野生植物を紹介し、両著作の異同についても言及されました。江戸時代の人々が、実に多様な山野草を食していたことがよく分かりました。(2) では、『江戸名所図会』『都林泉名勝図会』『東都歳時記』などに描かれた絵を紹介しつつ、元禄時代以後に江戸で発達した園芸植物を多数紹介されました。江南先生によれば、江戸時代には、多くの園芸品種が作出され、里山由来の多くの植物が園芸化されたようです。(3) では、シーボルトやケンペル、ツェンペリー等によって日本のツツジ、アジサイ、ユリ、花菖蒲、アオキ、キリ、ミヤマシキミなど多彩な植物がヨーロッパにもたらされ、今もヨーロッパの公園や街角を飾っている様子を、江南先生が近年訪れたイギリスのキュー植物園等の写真によって紹介されました。

主として自筆の植物画を多数スライドで映し出して行われた江南先生の講義は、私たちの身近な自然の多様な姿の美しさと郷愁を、聴講者に十分味わわせるものでした。茶話会で提供された「龍谷の森」のキノコのピクルスや花酒・果実酒もすべて江南教授の手製であり、里山の楽しみを参加者が満喫できるものでした。里山に多様な価値を見いだすことにおいて、江南先生の多彩な能力と試みが、多くのヒントを与えてくれることを確信しました。ご定年を迎えられても、今後いっそうのご活躍とご助力を願わざるをえません。